

「卒業」後は複数の医師で

福岡市にある音楽教室で7月、60歳代の女性が歌のレッスンを受けていた。時折、笑顔で正しい音程を示すのは、講師でシンガー・ソングライターのリンタロー・さん(35)。この教室などで週4、5回、2歳から70歳代の生徒に歌やギター、ピアノなどを教えている。シンタロー・さんは生ま

れながらに重い心臓病を患う。左心室から始まる大動脈が、通常と異なり、右心室につながっている。少し走っただけで息が切れる。放っておくと命に関わるため、1歳半の時から手術を繰り返した。

中学校で吹奏楽部に入っただけで、院中は、いつも枕元から流れる音楽に癒やされていた。「音楽で人生を生きる希望を与えたい」。高校は音楽科に進み、ピアノや発声法を学んだ。

卒業後にギターも習得。病院や福祉施設などで、ギターやピアノの弾き語りのライブを続けている。やりがいはあるが、体調の悪化をひしひしと感じている。

20歳代の時自宅からギターを背負い、自転車ですぐ20分の最寄り駅まで行けた。30歳に近づくとき、せいで息が苦しくなった。今は家から歩いて10分弱の音楽教室に車で通勤する。

「そろそろ卒業だね」

28歳の時、幼少期から治療を受けてきた小児専門病院の主治医から言われた。「卒業」とは、成人の診療科への移行を意味する。紹介されたのは、成人先天性心疾患外来がある九州大学病院(福岡市)だ。

日本成人先天性心疾患学会は今春、全国の約80病院を、大人になった患者の受け入れが可能な施設として認定した。九大病院もその一つ。循環器内科の坂本一郎さんと小児科の山村健一郎さんの医師2人が中心になって診療にあたる。

シンタロー・さんは月1回、同病院に通っている。今は血液の逆流により心機能が低下しており、心臓弁の手術を検討しているという。主治医の坂本さんは「九大病院では手術を行う際、小児と成人のそれぞれの心臓外科医と相談しながら進めるようにしています」と話す。

生まれくる子どもの約100人に1人は心臓病があるとされる。最近治療が進歩し、成人する患者が多い。新たな課題に直面する患者の現状を紹介する。(このシリーズは全5回)



ギターを手に歌の指導をするシンタロー・さん(右)